

地域と連携して実施する「パソコン・インストラクター実習」への取り組み

川田 博美・武岡 さおり

An action of “instructor PC training” by cooperation with an area

Hiromi KAWADA and Saori TAKEOKA

はじめに

この、「学生の手による『パソコン・インストラクター実習』」は、短期大学部生活学科生活情報専攻(以下、本専攻)の2年次後期に開講する選択科目「パソコン運用実習」の1コース(「パソコン・インストラクターコース」と「パソコン・セットアップコース」の2コース設定のうちの1コース)として位置づけられるものである^{(1),(2)}。

この実習の目標を、特に「実際のセミナーの開催に必要な業務を実体験すること」に置き、セミナー内容の企画、広報用ツールの作成、会場の設営や受付などの当日の業務、さらにインストラクターとアシスタントを履修者全員が体験した。

この実習の前提となるセミナーは、名古屋市教育委員会が企画する小学校高学年向けセミナーである。自治体側は、受講者の募集活動とそのための広報を担当し、本学が企画、広報資料の作成、会場と機材の提供、講師およびスタッフを担当して、共催という形で運営した。

「パソコン・インストラクター実習」の目的と内容

(1)「パソコン運用実習」で設定

本実習は、本専攻2年生の後期選択科目「パソコン運用実習」として実施したものである。この科目では、「パソコン・インストラクターコース」と「パソコン・セットアップコース」の2コースを設定しており、本実習はこのうちの1コースとして位置づけられる。

平成15年度は、2年生在学学生98名のうち、この実習を希望した19名の学生が7グループに分かれて、これまで本専攻での在学中に身につけたパソコン利用技術を集大成し、本学周辺地域(名古屋市瑞穂区)内全小学校配布用のチラシや本学内掲示用ポスターの作成、PR用ホームページの制作や、セミナーで取り上げる教材の作成、案内用掲示物の作成などを行った。

セミナー開催当日は、案内役、受付役(以上、グループ単位)、インストラクター役、アシスタント役(1人5~10分ずつのインストラクター役とそれ以外の時間に従事するアシスタント役のそれぞれの体験)に分かれ、約2時間の実際のセミナーを運営し、セミナーのスタッフとしての役割と内容を全員が実体験する。

セミナー当日に向けてとセミナー終了後の主な作業内容は次のとおりである。

①セミナーで取り上げる内容の企画

- ②瑞穂区内小学校を中心として配布するチラシの作成
- ③本学構内を中心に掲示するポスターの作成
- ④専攻のホームページ内で配信するPR用ホームページの制作
- ⑤セミナーで取り上げる教材の開発
- ⑥セミナー開催に必要な案内掲示物の作成
- ⑦当日利用する受講者の名札の作成
- ⑧お土産用ペーパークラフト作品の制作
- ⑨アンケートの作成と集計
- ⑩レポートの提出と作品集の作成

各作業は、本専攻在学中の1年半の間に習得した各種パソコン利用技術を集大成して行なった。

(2) セミナー「キッズパソコン広場2003～はばたきコース～」

実習の目標としたセミナーは、名古屋市教育委員会瑞穂青年の家と共催で開催したもので、同青年の家の事業の一環である。「青年の家」は青少年のふれあいと交流の場として設けられているもので、青少年のための学級、講座（ボランティア養成、教養、趣味、実技、スポーツなど）の開設、青少年グループ活動の指導育成などを行っている¹⁾。

「キッズパソコン広場2003～はばたきコース～」は、2003年11月29日に本学を会場として実施された2時間のセミナーである。対象を小学4年生から6年生とし、「お気に入りの写真や自分の写真を加工して、オリジナルグッズ（はがき、カレンダー、ペーパークラフトなど）を作る」という内容である。

定員30名に対し45名が応募したが、抽選により名古屋市内全域から小学4年生を中心に30名が確定した。

(3) 実習の方針

これまでも、卒業後の希望学生が短大での2年間の習得内容を総括すべくごく少数により、インストラクター役のみを実習するケースや、専門学校で、幼稚園児を対象としたセミナーでインストラクター役を実習するケースなどがあつた²⁾。

本学での取り組みは、単にインストラクター役やアシスタント役だけという表舞台だけを実習するのではなく、セミナーというイベントを通じて、スタッフ業務という舞台裏も実習させることとした。

実習を始めるまでの1年半の在学期間に習得した各種パソコン利用技術を集大成して実践的に取り組み、本専攻で習得した内容の総まとめ的位置づけの教科になることもめざし、その狙いを次のように定めた。すなわち、「卒業後、職場や家庭、地域におけるコンピュータ・リテラシー教育推進の役割を女性の感性を通して担えるよう、実際のセミナーを企画・運営する中で、自信を持たせると同時に自己実現の場とする」ことである。

したがって、一つのセミナーを実施するにあたり、対象を小学生高学年とした上、それにふさわしい内容や教材を選定するにあたってのマーケティング活動から、それに伴う広報活動、実際に開催するにあたって必要な業務とツール、さらに、必要な事後処理までを一貫して学生が主体となって運営することで、単にインストラクター役だけをいかにこなすかという方法論にとどまることのないように展開することをこの実習の方針とした。

(4) 実習の展開と作業内容

「パソコン運用実習」は、2年次後期の科目であり、学生は2年次4月の段階で、コースを決めることなく、履修登録している。9月中旬に後期が開始されると、まずコース内容を説明し、学生の希望により2つのコースに履修者を分ける。平成15年度は、「パソコン・インストラクター実習コース」を希望した学生は19名となった。

この19名を、1グループ2人～4人で構成する7グループに分け、グループ単位で各種作業を順次進めた。主な作業内容は前述の通りだが、基本的に全グループが、準備段階のどの作業においても必ず締め切りまでに作品を仕上げることを条件とした。

1). セミナー内容の企画

セミナーの趣旨と対象を解説した後、セミナーで取り上げる内容(教材)をグループで話し合わせ、プレゼンテーションの後に投票で教材を決定した。この段階でセミナーを前半と後半の2部(各60分)で構成し、扱う教材を、①自分の写真を利用したカレンダー作成、②クリスマスカードの作成に決定した。

2). 瑞穂区内小学校を中心として配布するチラシの作成

対象は名古屋市全域の小学生ではあるが、広報活動を体験するために、周辺地域(瑞穂区)の小学校7校の4年生以上全員に配布するチラシを作成した。必要記載事項のみ提示して、Wordを利用して、各グループで思い思いの作品を共同で作成させた。結果、7パターンのチラシができ、配布対象の全人数を7分割した上、各グループで、輪転機により印刷させ、クラス単位で仕分け梱包させた。クラス単位で梱包されたチラシは、学校単位に整理し、瑞穂青年の家側が各小学校の校長を通して、全員配布を促した。この作業には、1年次通年で開講した科目「実践ワード演習」での実習内容が反映されている。

3). 本学構内を中心に掲示するポスターの作成

次に、会場が本学であるため、学内周知のためのポスターを各グループ単位でWordで作成させた。チラシとは目的や内容が違うことを実感させた上、完成した作品は、学生に掲示場所を検討させ、学内各所に掲示させた。この作業には、1年次後期に開講した科目「文書デザイン」での実習内容が反映されている。

4). 専攻のホームページ内で配信するPR用ホームページの制作

名古屋市教育委員会側でも、一定パターンの告知ホームページ³⁾を利用してPRを行ったが、並行して、本学の専攻ホームページに掲示するPR用ページを各グループに作成させた。作品は、ホームページビルダーで作成させ、プレゼンテーションの後、優秀な作品を投票で選択し、Web上で発信したほか、各作品は作品集として公開した⁴⁾。この作業には、1年次後期に開講した科目「基礎ホームページ作成」と2年次前期開講の「実践ホームページ作成」での実習内容が反映されている。

5). セミナーで取り上げる教材の開発

最初の段階で、取り上げる内容は、①自分の写真を利用したカレンダーの作成、②クリスマスカードの作成と決めてあるので、教材とするために具体的な作品を各グループで作成した。インストラクターは全員が交代で行うが、セミナー当日に見本として利用する作品はカレンダー、クリスマスカードとも各1点であるので、プレゼンテーションの後、投票でその作品を決定した。代表として利用する作品が各1点決まったので、その作品を全員で繰り返し作成させ、手順の分析を行なった。この作業には、1年次通年で開講した科目「実践ワード演習」の実習内容が反映されている。

6). セミナー開催に必要な案内掲示物の作成

セミナーを学内で開催するにあたって、必要な案内掲示物を検討させ、分担して Word で作成させた。会場までのルートは、学内に2経路あるため、それぞれの経路に沿って、実際に歩かせ、必要な案内表示を決めさせたほか、受付や会場内に必要な掲示物を作成させ、前日の最終リハーサルの後、分担して掲示させた。この作業には、1年次後期に開講した科目「文書デザイン」での実習内容が反映されている。

7). 当日利用する受講者の名札の作成

受講者名簿が到着すると、それぞれの受講者の名札を分担して作成させた。単に、文字だけの表記ではなく、イラストなどを含めさせ親しみのあるものに仕上げさせた。作成した名札は、記念に受講者に持ち帰らせた。この作業には、1年次前期に開講した科目「パソコン&インターネット入門」での実習内容が反映されている。

8). お土産用ペーパークラフト作品の制作

受講者には、お土産として、ペーパークラフト作品を用意した。そのため、どのような題材のペーパークラフトがよいかを検討させ、CG作成ソフトを利用して作成させた。この作業には、2年次通年で開講している「卒業研究2」でペーパークラフトの作成に取り組んでいる学生を中心に担当させた。

9). アンケートの作成と集計

セミナーの終了時の提出を予定して、アンケート内容を検討させ、作成させた。

セミナー終了後の授業時間を利用して、集計を分担して行い、結果に基づき反省会を実施するとともに、名古屋市教育委員会に提出して保管した。この作業には、1年次通年で開講した科目「情報処理演習1(Excel)」での実習内容が反映されている。

10). レポートの提出と作品集の作成

9月中旬から11月末のセミナーの開催とそれに伴う準備作業、さらにその後のアンケートの集計や反省会、またセミナー終了後に届いた受講者である子どもたちからの手紙の内容などを総括して、全員にレポートを提出させ、一部の学生には、新聞や学内広報誌にその様子と感想を投稿させた。提出させたレポートやこの授業を通して作成された作品、また関連資料を作品集(冊子+CD-ROM)として年度末に発行した。

表1 セミナー当日まで直前1週間の実習プログラム

11月19日(水)	10:40~12:10	①当日分担決定 ②はがき作成案選択 ③担当者ミーティング
11月25日(火)	14:40~16:10	①カレンダー作成リハーサル ②担当者ミーティング
11月26日(水)	10:40~12:10	①案内関係作成 ②当日関連事前打ち合わせ
11月27日(木)	16:20~17:50	①はがき作成リハーサル ②担当者ミーティング
11月28日(金)	16:20~17:50	①会場、案内設営担当者ミーティング ②通しリハーサル ③最終ミーティング

表2 セミナー当日の実習プログラム

セミナープログラム	担当時間	担当者	担当内容	
第1部 カレンダー作成 (パソコン操作:中西)	10:10~10:15	水谷	導入, 作成するものの説明, 写真撮影の指示	
	10:15~10:25	(10人)	カレンダー担当9人+梅岡	
	10:25~10:30	加藤(多)	マウスの説明	
	10:30~10:35	加藤(真)	FDの扱いの説明, ファイルを開く	
	10:35~10:40	打田	イラストの削除(クリック, Del), 写真の挿入	
	10:40~10:45	杉山	写真のサイズ変更	
	10:45~10:50	池上	表の色変更	
	10:50~10:55	武藤	文字の色変更	
	10:55~11:00	村上	テキストボックスの作成, 文字入力	
	11:00~11:05	鈴木	テキストボックスの移動, 外枠削除	
第2部 クリスマスカード作成 (パソコン操作:鈴木)	11:05~11:10	金田	印刷プレビューによる確認, 印刷, 締めくくり	
	休憩	11:10~11:20	—	トイレ案内, 第2部準備(全員)
	第2部 クリスマスカード作成 (パソコン操作:鈴木)	11:20~11:25	大澤	導入, 作成するものの説明, ファイルの新規作成
		11:25~11:30	中西	ページ設定
		11:30~11:35	宮崎	ページ罫線の設定
		11:35~11:40	渡辺	イラストの挿入
		11:40~11:45	板津	イラストのサイズ変更
		11:45~11:50	梅岡	イラストの移動(レイアウトを整える)
		11:50~11:55	浅野	テキストボックスの作成, 文字入力
		11:55~12:00	松井	印刷プレビューによる確認
12:00~12:05	佐野	印刷, 締めくくり		
閉会	12:05~12:10	—	ペーパークラフト配布	

なお、11月29日に開催されるセミナー当日までの1週間は、それまでの週1回の授業に加え、学生の空き時間を利用して当日までの準備を実施した(表1)。

また、セミナー開催当日は、案内、受付業務等も班単位で分担し、セミナー開始後は、学生全員が、一度はインストラクター役を経験するよう配慮し、インストラクター役をしないときは、アシスタントとして、セミナー参加者2名ずつを分担して担当した(表2)。

実習にあたっての2つのコラボレーション

本報告の実習を実現するにあたっては、2つの連携があった。すなわち、①在学中に習得する技術の連携と②開催にあたっての地域との連携である。

(1) 在学中に習得する技術の連携

本専攻では、毎年のカリキュラム改定などを通して、より特色ある情報系短大を目指している。学習環境の現状は、「実践的情報処理教育の確立」を目指して、6つのシステムより成り

立つ (図1)。

- ①習熟度別クラス編成^{6),7)}
- ②カリキュラムの目的明確化
- ③トップクラスのカリキュラムの構築
- ④21種類の資格取得支援体制
- ⑤専門アドバイザー制度と学年別複数担任制
- ⑥携帯・e-メールコミュニケーションシステム^{8)~12)}

そこに、「ITを仲立ちとした、人と人との各種交流プログラム (ハートライブ・プログラム)」を中心として、IT機器を人と人とのコミュニケーションに活用する能力や自信を養う、体験型「人間性・社会性共育」が連携して展開する教育体制を目指している (「ハートライブ・プロジェクト」)。本報告の実習は、その典型として実現したもので、2年間の短大教育の集大成的な意味合いを込めた実験といえる。

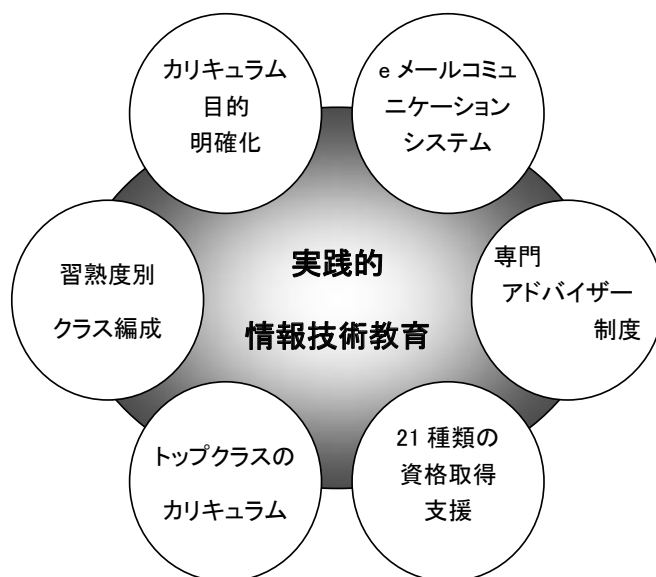


図1 生活情報専攻の実践的情報教育環境

(2) 開催にあたっての地域との連携

本実習の実現には、地元自治体との連携が不可欠であった。先にも述べたように、この実習の前提となるセミナーは、名古屋市教育委員会が企画する小学校高学年向けセミナーとし、自治体側は、募集と広報を担当し、本学が企画、広報資料の作成、会場および機材の提供、講師およびスタッフを担当して、共催という形で運営した。

名古屋市教育委員会には、土曜日の活用という課題に伴い、小学生向けのセミナーを運営する必要性があった。主管となった瑞穂青年の家には、セミナーに活用できるノートパソコンが12台配置されているものの、できるだけ多くの受講者を確保したいが、多くのほかのセミナーのテーマを抱える同所において、予算的にも複数回の開催で受講者を確保するには無理があるというジレンマがあった。

本専攻では、スクール・インターン実習方式でパソコン・インストラクター実習を実現する方向性もあったが、新たな実習現場の獲得には、解決しなければならない課題も多く、また、独自でセミナーを開催するには、宣伝費用も捻出しにくいことから、対象となる小学生への広報に強い、あるいは地域の小学校とのパイプの太いパートナーを探していた。

それら双方のメリットが一致して、実現に至ったといえる。その連携により、本専攻側は、受講者集めや管理を考える必要がなく、セミナー自体の実施のみに専念することができた。また、自治体側は、会場や講師費用、さらにアシスタントやスタッフの配置などについて考える必要がなく、30名規模の土曜日利用の地域サービスを事業として実施することができた。

こうした事情から、お互いのメリットにより、双方の得意な領域での業務分担により、双方の目的を達成する新たな連携形態ができ上がったと言える。



図2 生活情報専攻の「パソコン・インストラクター実習」に関する記事¹³⁾

まとめ

この取り組みは、平成15年4月に本専攻から名古屋市教育委員会への提案の後、何度かの打ち合わせを経て実現に至った。どちらかという速い展開で実現したと思われるが、それは、運営にあたった2者のお互いのメリットが非常に明確に作用しあった結果であろうと思われる。名古屋市教育委員会のこの事業は、平成16年度も継続することが決まっており、さらには、これが機会となり、実際に地域の小・中学校に学生が出向いてパソコン利用業務の補助者として実習する「スクール・インターン実習」への展開が期待されることとなった。

実際に参加した学生は、一様にやり遂げた充実感を感想に述べている。普段、人前が出る機会の少ない学生自身が、当初の目的の一つである、「それぞれの自信」をいくらかでも持つことができたであろうと思われる。

2回目となる平成16年度にもこの教科「パソコン運用実習」を多くの学生がすでに履修登録している。それにむけて、今後は、学生の満足度や充実度、さらには自信の持ち具合を計数化する手法を検討していきたい。

要約

短大2年生を対象に、「パソコン・インストラクター実習」を、地域（名古屋市教育委員会）と連携して実施した。これは、通常の授業を利用して、地域（名古屋市内）の小学生を対象としたパソコン・セミナーの内容の企画、広報資料の作成、当日の運営までを、すべて学生の手により実施するもので、実際に一般の受講者を募集するセミナーの開催をその目標としている。自治体はその事業の一部としてセミナーを企画したうえ、受講者を募集、管理し、そのセミナーの開催自体を授業の一環として短大が請け負うこの連携形態は、新たな地域連携の形として実験的に進めたものである。授業そのものにも一定の効果があつたと思われるので、その概要をまとめた。

注

- (1) 選択科目「パソコン運用実習」は、平成4年度入学生対象の新カリキュラムで2年生後期科目として新たに設定した科目であり、平成5年に始めて開講した。平成7年度入学生向けの新カリキュラムでは、教科「パソコン・インストラクター実習」（1単位、2年次後期開講）として独立する。したがって、「パソコン運用実習」の中の1コースとしての設定は、平成6年度入学生までで、同様の方式では、平成6年度入学生まで3回実施することになる。
- (2) 本実習の位置付け

(2-1) ハートライブ・プロジェクト

本専攻では、平成6年度4月より、最新のIT活用能力を身に付け、職場や地域で即戦力となるための徹底した「実践的情報技術教育」と、IT機器を人と人とのコミュニケーションに活用する能力や自信を養う、体験型「人間性・社会性共育」の2つの「きょういく」プログラムを軸とした「ハートライブ・プロジェクト」を本格的に展開している。

これまで技術教育に重点をおき、IT機器の活用能力を中心に教育を実施してきたが、IT機器の利用が増え日常化するにつれて、バーチャルな人間関係が表面化してきたように思われる。情報技術教育機関としてあらためて、このIT機器の活用を考えたとき、人と人とのコミュニケーションに効果的に用いられるべきではないかという危惧にいたり、ITを仲立ちとした人と人との各種交流プログラムを加える必要性を感じるに至った。情報教育機関では、とかく、日進月歩で進む情報技術に追いつく教育を実践しがちであるので、このプログラムの提供は、かえって新鮮であり、女子教育機関としての特色として位置づけることができると思われる。

「ハートライブ・プロジェクト」とは、短大での2年間で4つの期間（「ライブ・ステージ」と呼ぶ）にわけ、順に「見つめる（自分探し）」「伸ばす（資格取得）」「描く（就職活動）」「想う（夢の実現）」と名づけ（カルテット・スタイル）、それぞれの期間の目標を明確にした上、その目標に応じた「ハートライブ・プログラム」を体系的、連続的に授業カリキュラムに加えて、または授業の一環として展開し、一人ひとりを大切にサポートしていくという教育方針である（図3）。

(2-2) ハートライブ・プログラム

「ハートライブ・プログラム」とは、「ITを仲立ちとした人と人との各種交流プログラム」をいい、

- ①学生自身が他の学生や地域の人々と実際に触れ合う機会
- ②実践的に自分の力を試せる機会
- ③学生が主体となって運営する機会

の以上3つの機会を学習環境として多く体験させるプログラムである。

これらの教育システム環境を「ハートライブ・プロジェクト」と名づけ、2年間の一貫した教育システムとして位置づけ、本来習得する各種実践的な情報技術ばかりでなく、さらに、

- ①企画・運営能力
- ②自己表現力（プレゼンテーション能力）
- ③人と人とのコミュニケーション能力
- ④相手を思いやる能力

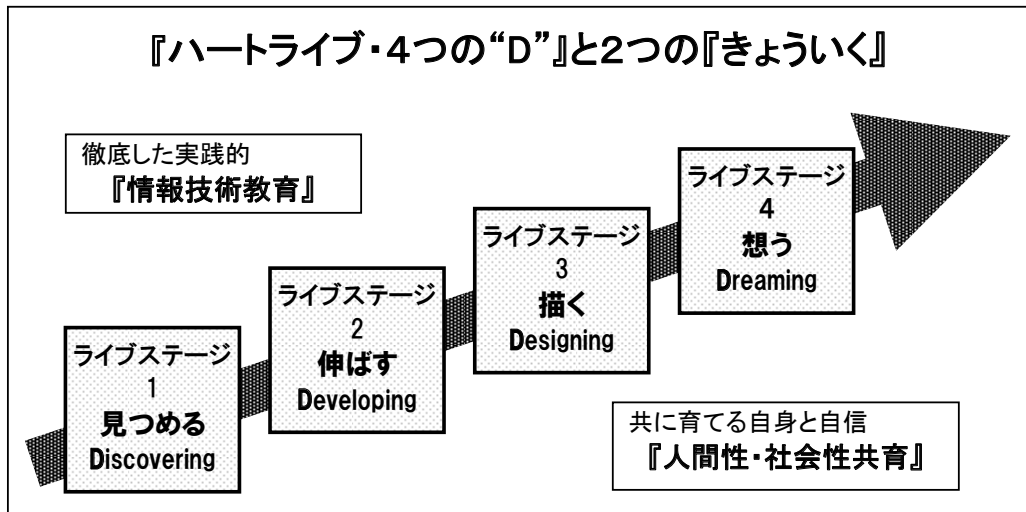


図3 生活情報専攻の『ハートライブ・プロジェクト』

なども備わった「人間のて実践的な職業人の育成」と職業人としての即戦力ばかりでなく、将来、家庭や地域での活躍につながるような自信を身に付けた「自立する女性人材の育成」を目指すものである。

(2-3) パソコン・インストラクター実習

本報告の実習は、2年後期(「想う」ステージ)に展開する「ハートライブ・プログラム」の一つとして位置付け、地域の小学生高学年を対象としたセミナーを学生の手により企画・運営を行い、当日のインストラクター、アシスタント業務を体験することにより、学生と地域の小学生、また学生同士の交流を実践するものである。24種類を設定してある「ハートライブ・プログラム」の17番目のプログラムにあたる。

参考文献

- 1) 名古屋市教育委員会瑞穂青年の家：
<http://www.city.nagoya.jp/ku/08ku/mizuhoseineninfo/mizuhoseineninfo.html>
- 2) 天王寺経理専門学校デジタルカレッジ
<http://www.tenkei.ac.jp/02/09kids.html>
- 3) 名古屋女子大学短期大学部生活情報専攻：
<http://www.nagoya-wu.ac.jp/tan/sci-joho/>
- 4) 名古屋女子大学短期大学部生活情報専攻：
<http://www.nagoya-wu.ac.jp/tan/sci-joho/>
- 5) 天王寺経理専門学校デジタルカレッジ：<http://www.tenkei.ac.jp/02/09kids.html>
- 6) 川田博美、武岡さおり、滝下治里、田口継治、尾崎正弘：“能力別クラス編成による効果的な情報教育カリキュラム実現の試みについて”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.246-249 (2002)
- 7) 田口継治、川田博美、武岡さおり、杉村藍、西尾尚子、滝下治里、加藤恵子、尾崎正弘：“能力別クラス編成とインターネットを利用した教育指導方法の実験について”、名古屋女子大学紀要(人文・社会編)第49号(2002)
- 8) 田口継治、川田博美、武岡さおり、尾崎正弘：“インターネットを利用した教育指導方法の実験について”、教育システム情報学会第27回全国大会講演論文集、pp.335-336 (2002)
- 9) 武岡さおり、小山幸治、川田博美、尾崎正弘、足達義則：“顔による行動追跡を付加した教育システムの検討”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.236-239 (2002)
- 10) 小山幸治、武岡さおり、川田博美、尾崎正弘、足達義則：“理解度向上支援総合ネットワーク型教育システムの構築—データ構造に着目したDBの構築—”、日本教育情報学会第18回年会論文集、pp.254-257 (2002)

- 11) 尾崎正弘、武岡さおり、川田博美、小山幸治、足達義則：“個別学習によるハイパーテキスト「シスアドブック」の開発”、教育システム情報学会第27回全国大会講演論文集,pp.305-306 (2002)
- 12) 武岡さおり、尾崎正弘、川田博美、足達義則：“学習者認識のための顔画像検出と顔の向き認識の基礎的実験”、名古屋女子大学紀要(人文・社会編)第49号,pp.129-136 (2002)
- 13) 中日新聞：2004年1月27日付